

特定非営利活動法人 太平洋戦史館

戦史館だより

2025年6月01日発行
 戦史館事務局〒029-4427
 岩手県奥州市衣川陣場下
 41番地 齋オフィス花岡
 編集発行人 花岡千賀子

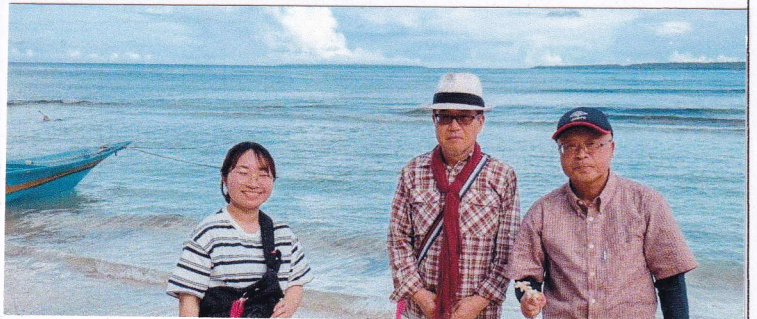
会長理事 岩淵 宣輝 事務局長 花岡千賀子 ☎0197-52-3000

今年の春は寒暖差が大きく夏と冬が日替わりで…と入力して、1年前の戦史館だよりも同じような書き出しだったことに気づきました。1年前の気候を忘れているのか、年々気候変動が激しくなるのか、いずれにしても高齢者に限らず誰でも、いのちを守ることを最優先にこの夏を乗り切りましょう。今夏は戦後80年の節目、戦史館は戦後50年を機に活動を開始したので30周年の節目です。今の戦史館は80周年記念事業を行える体力は持ち合わせていませんが、活動方針はこれまで通り。①遺骨帰還事業への協力と②平和のための常設展示室の維持を継続しています。活動内容はずいぶん変化しましたが…。

「未帰還兵の捜索」から始まり、厚労省事業を受注して、現地の遺骨情報を収集する事業に繋ぎ、現在は遺骨収集推進協会が主体となって構成団体である戦史館は、現地への派遣を希望する会員を推薦することで活動を継続しています。この号には3本の新聞記事を同封しています。**記事その1 その2 東京新聞** 4月14日付け

『こちら特報部』記事の両面コピー。3月ビアク派遣に参加した門池啓史さん、松本勝司

さんはじめ関係者への取材で構成された記事です。写真は戦史館から参加した3名。ビアク滞在最終日、無事任務を終えほっとした表情…左の根井亜弥さんは岩手大学学生で、岩淵会長の岩大での講義の受講生。中央は門池さん右は松本さん



昨年11月の派遣計画が様々な理由で延期されたビアク派遣ですが、何とか3月に実施にこぎつけ、日本兵の可能性が高い36柱の遺骸が発見されました。次のページに門池さんの派遣報告を掲載しています。

★今後のパプア州派遣実施計画＝サルミ・ジャヤプラ方面は7月26日～8月8日（派遣希望者募集中。締切り間近！） ビアク・スピオリ方面11月下旬～12月下旬頃。西パプア州マノクワリ方面2026年2月中旬～下旬を予定。封筒ページも参照を。問合せは戦史館へ。

同封記事 その3 北海道新聞 5月10日『記者がたどる戦争』

戦史館Webの常設展示のページを見た記者が大叔父さんと同じ「勝部姓」の水筒を見つけ訪問取材を受けた記事を紹介します。語り継ぐための活動方針②として展示室を維持することは重要ですが、メンテナンス修繕が不可欠です。

5年前には木製デッキ通路、2年前には3階の収納スペースを修繕、昨年は水回り機器を取替えました。

『終活修繕』のはずが、年々不具合が見つかります。

今年は、西方向の強い風雨で腐り始めた支柱回りの修繕工事が梅雨前に完成するように目指しています。

会員の皆様 いつもご支援ありがとうございます。



「第3次インドネシア現地調査・遺骨収集派遣」に参加して 門池啓史（ヒロシ）

私は太平洋戦史館代表三人の一人として、一般社団法人・日本戦没者遺骨収集推進協会主催による「第3次遺骨収集派遣」に参加し、去る3月5日より19日まで、インドネシア、パプア州のビアク島を訪問した。私はかつてインドネシアへの技術協力のため、複数回ジャカルタからバンドン方面を訪問していたが、今回は約30年ぶりのインドネシア訪問となった。

私の父（1920年生まれ）は81年前、このビアク島に駐留していた日本兵だったが、私が幼少の頃よりマノクワリ～ビアク島での戦争体験を頻繁に語ってくれた。とりわけビアク島での話は過酷ではあったが、幼い私にはどれも新鮮で、父の戦争体験を聞くのがとても楽しみだったという一風変わった少年であった。よって私には「ビアク」という名前は長年親しみのある言葉である。父はこのビアクから奇跡的に生還した稀な日本兵であったが玉砕する前にマノクワリの司令部から戻る命令を受けたということで、僅か一小隊でビアクから小舟で脱出したようである。父は生前「戦死した戦友の慰霊のためにビアクに行きたい」と何度も言っていたが、意を果たせずに40年前に他界した。

今回のこの事業は私にとって遺骨収容ともう一つ、父に成り代わり、亡き多くの戦友の慰霊をすることが個人的な目的である。太平洋戦史館からは私の他に、松本勝司氏と根井亜弥氏が参加された。松本氏は大叔父様がビアクで戦死されており、根井氏は彼女が通う大学で、岩淵会長の講義を受講されており、若者代表のような形で参加されたが、次世代を担う若者の参加は大変良いことではないだろうか。

まだ肌寒い羽田を出発。国内便に乗り継ぎビアク島到着。翌々日から遺骸収容が始まった。3月8日は海岸近くにある『第二次大戦慰霊碑』に全員で慰霊をしたが、この近くの山に墜落したと言われている旧日本軍飛行機の搭乗員の遺骸がこの慰霊碑内にあるということであった。早速、日本とインドネシア二人の専門家による鑑定が行われたがその遺骸は日本人ではないだろうという結果だった。9日は日曜日ということもあり、遺骸収容は行わず『戦没日本人の碑』で慰霊、その後“Goa Jepang”日本人洞窟見学を経て、米軍が上陸したボスネックへ行き、慰霊をした。



余談だが、私の父は当時この上陸地点近くにいたようで「朝起きたら水平線には全て米艦船が来ていて、これで自分の命も終わりだなと思った」とかつて呟いていたことを私は明確に覚えている。

その後、近くにまだ旧日本兵の遺骸があるかもしれないという情報を元に、ジャングル数カ所で搜索したが、遺骸は発見されなかった。

3月11日から12日はボスネック村のアンドリュウ

前ページより

バリにて地元住民の許可を得て、マンドンサーと呼ばれている洞窟を探索した。ジャングル奥深く、皆で道なき道を進み、崖を登って下って大変であったが、何とか全員無事洞窟までたどり着くことができた。この洞窟には多くの遺骸があるとの事前情報もあり、かなり期待された。

結果として遺骸38柱が見つかり、鑑定の結果そのうち36柱が日本人の可能性があるとされた。

日本製の薬のビン、飯盒、九九式小銃か九九式軽機関銃の銃弾が多数、遺留品として散在しており、状況的に見て旧日本兵の可能性を強く思わせた。



日伊専門家の先生の鑑定では、36柱のうち、10代後半の日本人男性と思われる遺骸が3柱。50代の日本人男性と思われる遺骸2柱が含まれていたとのことである。

私は個人的に10代後半と50代のこの5柱に関しては不思議に感じた。当時、少なくとも50代の日本兵はまずいないと思われ、なぜこの洞窟に50代の日本人がいたのか、私には不思議に思われた。

岩淵会長によると飛行場などの設営隊が日本から来ており、その中には50代がいたのかもしれないということである。それにしても当時の50代といえればかなり老人に近く、遠い日本からこの地に来ていただろうことが意外でもあった。10代後半の日本人の可能性のある3柱についても、日本兵ではないとは言い切れないが、当時の徴兵年齢は20歳であったため、私は設営隊の方々ではないかと勝手に想像した。

とにもかくにも36柱にも及ぶ日本人の可能性のある遺骸が収容できたことは、大きな収穫であったと思われる。その後、遺骸はジャカルタへ運ばれ、インドネシア側のDNA鑑定が行われる予定である。

最終日には、全員でジャカルタのインドネシア文化省と日本大使館を表敬訪問し、今回の遺骸収容の結果報告をして帰国の途についた。

今回の事業は私としては全くの初体験のことであり、反省材料は多々あったが、とにかく体力が要求されることを痛感し、また事前に人骨の勉強をしておくべきだったと反省させられた。個人的には、私は父親の果たせなかった多くの亡き戦友の慰霊を果たすことができ満足することができた。これも戦史館の皆様のおかげであると、深く感謝申し上げます。

